

諸岡 B 遺跡20次

福岡市埋蔵文化財調査報告書第776集



2003

福岡市教育委員会

序

福岡市の都心の南側に広がる平野部は、早くから住宅地として開け、最近では再開発の時期にさしかかっています。今回発掘調査が実施された諸岡B遺跡付近も例外ではなく、低層の個人住宅が、中・高層のマンション兼住宅に建て変りつつあります。

一方で、諸岡B遺跡は、わが国最古の船作遺跡である板付遺跡に近く、古くは旧石器時代からの遺構・遺物が調査されてきた貴重な遺跡でもあります。本書で報告する第20次調査では、中世を主とする集落の一端を調査し、多くの成果を上げることが出来ました。

本書が市民の皆様に、また学術研究の場でも活用されることを念願しております。また、調査に際してご協力やご指導を賜りました方々に、心から謝意を表します。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例　　言

1. 本書は、マンション建設に先だって福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、諸岡B遺跡第20次調査（福岡市博多区諸岡2丁目9番5、7、8）の概要報告書である。
2. 本書の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図は、大庭康時・佐藤信・大浦菜緒が作成し、大庭が浄書した。なお、本書の遺構実測図および本文中に用いている方位は、すべて磁北である。
4. 本書に使用した遺物実測図は、井上涼子が実測し、浄書した。
5. 遺構写真は、大庭が撮影した。
6. 遺物・記録類の整理には、上塘貴代子・萩尾朱美・森寿恵があたった。
7. 本調査に関わるすべての記録・遺物は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9862	遺跡略号	M R B - 20
調査地地番	博多区諸岡2丁目9番5、7、8	分布地図番号	板付24
開発面積	817.02m ²	調査対象面積	493m ²
調査期間	1999年2月1日～2月17日		

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたる経過

平成10年（1998）8月、藤ユキ子から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区諸岡2丁目9番5、7、8の817.02m²についての埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。同地は、福岡市教育委員会が諸岡B遺跡として周知している範囲内に含まれていたため、8月25日に試掘調査を実施して遺構を検出、開発にあたっては、発掘調査が必要であるとの判断にいたった。

申請地内には、住宅が残っていた為、その解体に合わせて、調査時期を設定し、翌1999年2月1日より発掘調査に着手、同17日に終了した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田英俊
調査統括	同	文化財部埋蔵文化財課 課長	柳田純孝
		第2係長	山口謙治
調査庶務	同	文化財部埋蔵文化財課 第1係	河野淳美
調査担当		文化財部埋蔵文化財課 第2係	大庭康時

第二章 発掘調査の記録

1. 調査地点の立地と現況

諸岡B遺跡は、諸岡八幡神社が鎮座する標高28.7mの小丘陵に立地する。この丘陵は、北に長く延び、東西にはやや強い傾斜で下っていく。第20次調査地点は、那珂川の支流である諸岡川に削られた、その東辺のやや西側に位置している。

第20次調査地点の現況は宅地であるが、背面とは2m以上の崖面を作り削平されている。

本調査地点の周辺では、これまで数回の発掘調査が行われ、弥生時代以降の遺構・遺物が出土している。隣接した諸岡B遺跡東辺付近の調査では、中世の柱穴・溝・井戸などが



Ph. 1 調査区全景（北東より）

調査されており、本調査地点でも中世を主とした遺構が検出されることが予想された。

なお、本調査地点においては、申請地の北半分で、既存建物の搅乱が著しく、試掘調査では遺構の存在が確認できなかったため、南半分を発掘調査の対象地とした。

2. 発掘調査の概要

諸岡B遺跡第20次調査で検出した遺構は、溝、井戸、土坑、柱穴などである。

(1) 溝

調査区東端付近に集中して、3条の溝状遺構を検出した。

002号遺構

後述する井戸や、溝（003号遺構）に切られ、東肩しか残っていない。浅い二段掘りを呈する溝で、30cmほどの深さを持つ。

Fig. 3-1 は、中国の白磁である。薄手の優品だが、器種不明。内面は、無釉。2は、小型の石鍋である。滑石製。

肥前陶磁器が出土しており近世の溝と思われる。

003号溝

幅120cm、深さ30cmの溝で、主軸方位は磁北から30度西偏する。

Fig. 3-3・4 に図化に耐えた遺物を示した。3は、同安窯系青磁の皿である。4は、東播系須恵器の鉢である。内外面とも、横ナデ調整。

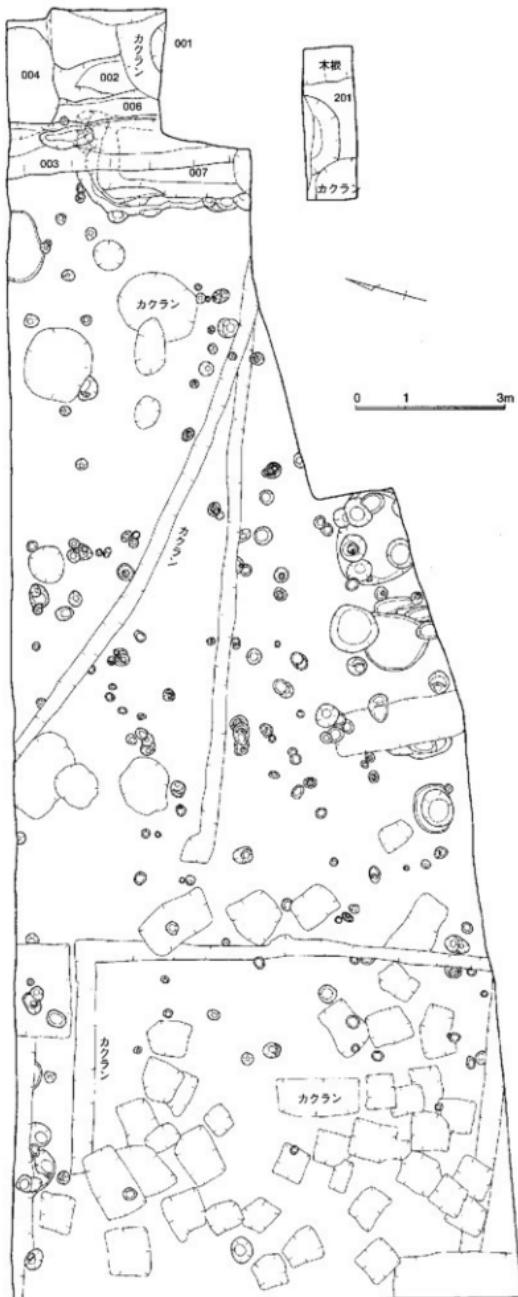


Fig. 1 遺構全体図 (1/100)

遺物の年代観とは合致しないが、後述する井戸を切っていることから、15世紀以後の溝である。

006号遺構

003号遺構を切る溝である。幅100cm、深さ10cmをはかる。

図示できる遺物はないが、肥前陶磁器出土し、近世に属する。

(2) 井戸

004号遺構

調査区東端付近の、北辺にかかって検出した井戸である。

ほぼ円形の掘り方のやや東よりに方形の井側を作る。掘り方は、二分の一弱を調査したにとどまるが、直径240cmほどに推定できる。井側は、四隅に杭を立てて、それぞれに桟木をわたし、その外側に細竹を立て並べたもので、やや重ではあるが、一辺50~60cmをはかる。もともとは、

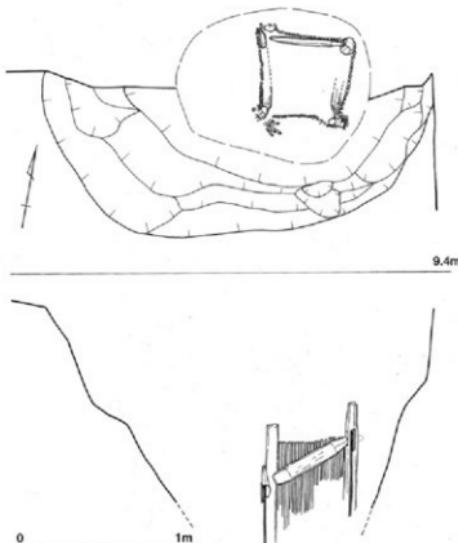
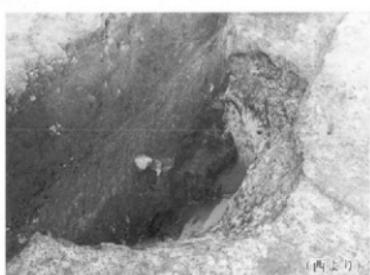


Fig. 2 004号遺構実測図 (1/30)



(西より)



井側より西にむかひ

Ph. 2 004号遺構

井側のほぼ半分も調査区外になるのだが、丁度井側の奥壁から手前が崩落したため、検出することが出来たものである。深くなるにつれて掘り方が狭くなり、さらに崩落する恐れが高かったため、井戸底の確認は断念した。そのため、検出した深さは、150cmにとどまっている。

出土遺物の一部を、Fig. 3-10~16に図示する。10は、土師器の碗である。器表はひどく磨耗しており、調整痕が窺えない。11は、同安窯系青磁の皿である。小片が出土したにとどまる。12は、中国産の無釉陶器の底部である。壺であろう。13は、土師質土器の片口捏ね鉢である。外面には指頭圧痕、内面には刷毛目が残る。黄灰色を呈する。14は、瓦質土器の擂鉢である。内外面および外底部は刷毛目調整で、外面の底部近くは指頭押圧する。15は、土師器の土鍋である。磨耗が激しいが、内面には

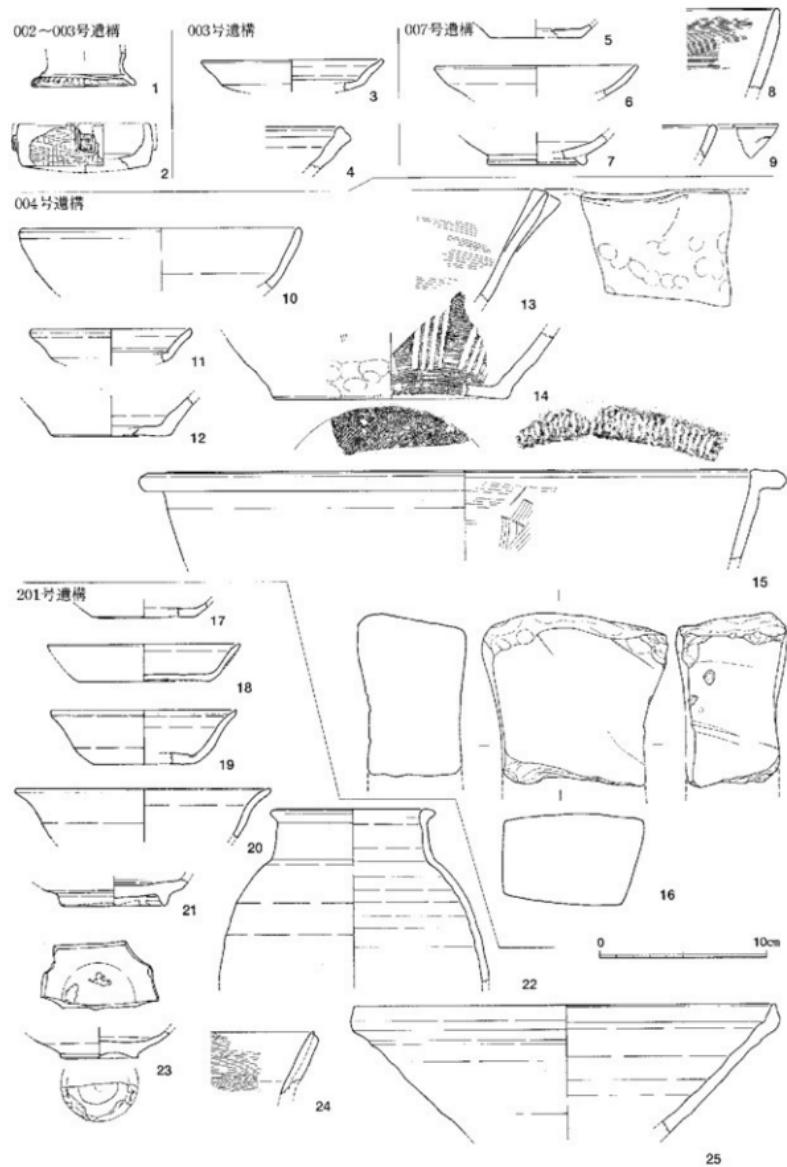


Fig. 3 出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 3 007号遺構（北東より）



Ph. 4 201号遺構（南東より）

刷毛目、口縁上面には縦目圧痕が見られる。16は、砾石である。砂岩製で、四側面を使用している。

15世紀前後の井戸と考えられる。

(3) 土坑

007号遺構

長方形の土坑である。長辺370cm前後（推定）、短辺200cmほどで、壁はほぼ直立し、深さ130cm前後を測る。底面には薄く灰色の粘質土が堆積しており、浅く水が溜まっていたものと推測される。15世紀代の土坑である。

Fig. 3-5～9に出土遺物を示す。5～8は、土師器である。5は皿で、底部を回転糸切りする。6は、壺である。薄手で大きく開く部を持つ。7は碗で、時期的には遡る遺物である。8は、土鍋である。内面は刷毛目、外面には厚く煤が付着している。9は、竈泉窯系青磁碗である。口縁下に、雷文の一部がのこる。

201号遺構

南側にあけたトレーナチ状の調査区で調査した、円形の土坑である。大半は調査区外に出るが、径170cmほどに推定でき、深さは45cmを測る。15世紀代の土坑であろう。

Fig. 3-17・18・24は、土師器である。17は皿、18は壺で、底部を回転糸切りする。18は、口径11.5cm、底径7.8cm、器高2.25cmを測る。19・20は、白磁である。19は皿、20は碗で、ともに口縁端部の釉を焼き取り、口禿げにする。21は、竈泉窯系青磁の小鉢である。全体に施釉した後、高台疊付きの釉を焼き取る。22は、中国の褐釉陶器の瓶である。全体に薄手で、濃い褐色の釉を施す。23は、朝鮮王朝青磁の皿である。細かい白沙をおいた目痕が並ぶ。25は、東播系須恵器の鉢である。

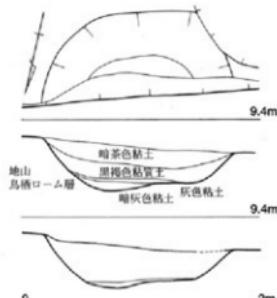
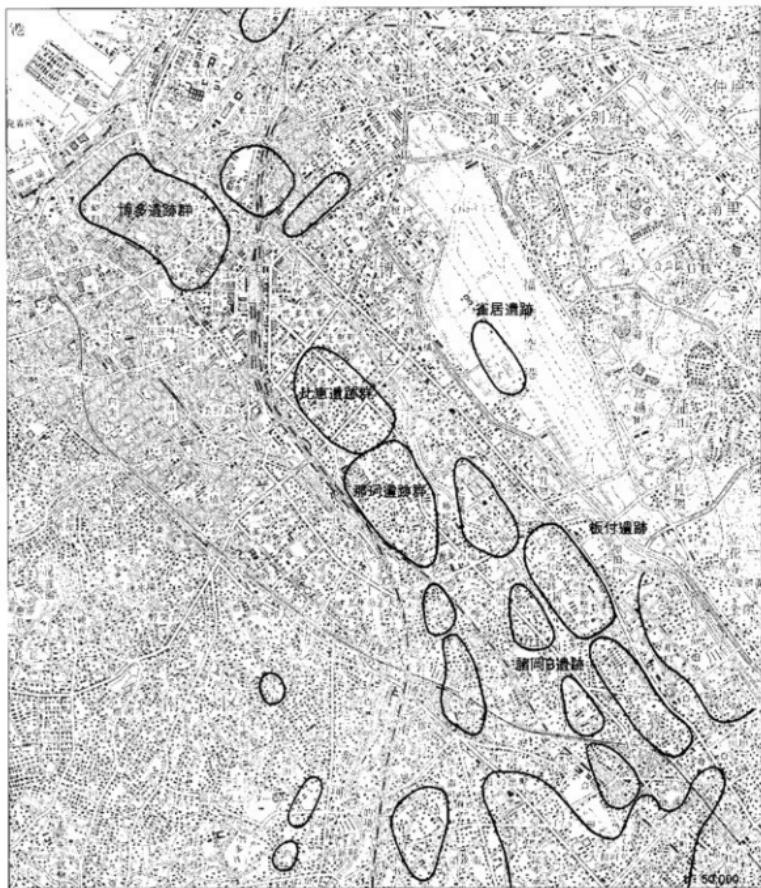


Fig. 4 201号遺構実測図(1/40)

第三章　まとめ

諸岡B遺跡第20次調査地点は、攪乱が激しかったため遺構の遺存状況が悪く、十分な検討が出来なかった。これまでの周辺の調査結果を合わせると、丘陵の東裾部を段切りして、居住空間を作り、西側の丘陵斜面に地下式横穴を営んだといえる。この段切り造成は、現況で2mにも及ぶ崖をなしながらも遺構が残っている事から、中世前半期以前に遡る可能性が大きいものと思われる。



諸岡B遺跡20次

2003年（平成15年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 (株)富士印刷社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-45